

三木清『技術哲学』における「技術と道徳」

Technology and Morality in Miki Kiyoshi's *Technological Philosophy*

笠井 哲

福島工業高等専門学校一般教科

Akira Kasai

Fukushima National College of Technology, Department of General Education

(2010年9月14日受理)

Neither did Miki Kiyoshi generally discuss technology nor establish philosophical foundation for technology in *Technological philosophy*. This book aimed at clarifying the relations between technology and morality. Therefore he first considers technological essence, and then discusses technology and society, technology and morality.

The purpose of this paper is to clarify how Miki connected morality with technology in *Technological Philosophy*, and to catch clue about the modern engineering ethics.

Key words: Miki Kiyoshi, technology, morality, engineering ethics, *Technological philosophy*

1. はじめに

三木清(1897~1945)の『技術哲学』は、単に技術について一般的に論じ、技術の哲学的基礎づけをするというのではなく、技術と道徳の関係を明らかにすることを目指したものである。したがって、全体の構成もまず技術の本質について考察し、次に技術と社会、技術と道徳について論じている。

本稿の目的は、『技術哲学』において三木が、技術と道徳を如何に関連付けていたかを明らかにし、現代の「技術者倫理」を考える手掛かりを掴むことである。

2. 『技術哲学』の背景

三木清は、1897(明治30)年に兵庫県に生まれた。一高在学時に、西田幾多郎の『善の研究』に感銘を受け、京都帝国大学で哲学を学ぶことを決心する。1922(大正11)年からドイツに留学し、1927(昭和2)年に法政大学哲学科の教授に就任した。

しかし1930(昭和5)年に日本共産党への資金援助の嫌疑で検挙され、職を退くことを余儀なくされる。1945(昭和20)年6月12日、治安維持法違反の容疑者をおかしたという嫌疑により、検挙・拘留される。同年9月26日に、豊多摩拘置所で疥癬の悪化により獄死した。三木のこの非業の死をきっかけに、GHQは治安維持法を撤廃したとされている。

三木は、師の西田幾多郎とは異なり、アカデミズムの中で哲学的思索に没頭する境遇に恵まれず¹⁾、いわば在野の評論家として論壇時評や政治的社会的評論を数多く書いている。その間をぬって、本格的な哲学論文や著作を、次々と発表した。また評論や時評もその内容は、不器用なまでに哲学的であり、彼はその生涯を通じ、一貫して哲学的な思索者であった。

三木が評論や時評で「技術」をテーマにするのは、1934(昭和9)年頃からであった。はじめは主として「技術と芸術」という問題を、取り上げて論じている。芸術の本質を明らかにするために、技術と対比するという方法を取っているのは、芸術と技術の両者が、「制作」という点で共通しているからである。

三木は1941(昭和16年)10月、岩波講座の『倫理学』の一冊として「技術哲学」を発表し、翌年付録2編を加え同じ題名で、単行本として出版した。三木の哲学は、行為の哲学であり、その哲学を構成する基本概念の一つは「技術」の概念である。道具を製作し、物を生産する行為から芸術の創造行為に至るまで、人間の行為は、すべて技術的であると三木は考える。技術的でない行為はない。技術は、人間存在の本質に根ざしたものであるとする。

三木の哲学的著作の多くは、講座ものの一巻として書かれた。『技術哲学』も倫理学講座の一冊であるた

め、一定の外的制約を受けている。すなわち、この著作は、単に技術について一般的に論じ、技術の哲学的基礎づけをするのではなく、技術と道徳・倫理との関係を明らかにすることを目指す。

したがって全体の構成も、まず技術の本質について考察し、次いで技術と社会、技術と道徳について論じる。これで、技術論の様々な主題がすべて論じ尽くされたとはいえない。

しかし、技術の問題を倫理学講座の一つのテーマとして取り上げ、道徳を技術と関連づけて考察するところに発想の新鮮さがあり、三木の問題意識がうかがわれる。技術論の対象が、狭義の生産技術にとどまらず、社会技術、観念技術、心の技術に及んでいくところに三木の技術論の特色がある。その背後には、技術の概念を基礎にすえた、行為の哲学としての彼自身の哲学がある。

まず三木の『技術哲学』を中心に、彼が技術概念をどのように捉えていたか、また技術の概念を基礎にして、彼自身の哲学をどのように構想していたか検討してみよう。

3. 適応のための技術

『技術哲学』の冒頭において三木は、

技術というものを如何に考えるにしても、それが行為に関わることは明らかである。為すこと、為し能うことが技術においては決定的である²⁾。

と述べ、技術の本質を行為から考えようとする。彼によれば、技術は普通には一定の目的を達成するための手段、あるいは手段の体系と考えられてきた。それが誤りというわけではない。しかし、

技術を手段と考えることは、技術を主として道具の見地から考えることである³⁾。

道具は確かに手段である。しかし、道具が技術ではない。

技術は行為であり、行為の形態である。道具は技術的行為の構成的部分としてその中に入ってくる一つの要素に過ぎない⁴⁾。

もちろん三木は、技術を手段、道具の見地から規定することを全面否定するわけではない。目的と手段、道具と機械という観点からも、技術について考察している。しかし彼の技術を捉える基本的観点は「行為」にある。ここに彼の哲学が示されている。

しかし、行為をどう捉えるか。人によって立場によって多様な捉え方があるであろう。『技術哲学』の時

期における三木は、当時の心理学の見地を取り入れ、行為を「刺激に対する反応」「作用に対する反作用」と規定し、行為を主体の環境に対する「適応」という観点から捉えていく。

主体が環境から作用され、逆に主体は環境に作用する。そこに適応という関係が認められる。主体は環境に適応することによって生きてゆくのである⁵⁾。

適応は、さしあたり反射的、本能的に行われるが、環境が変化して新しい環境になった場合、それに適応しうる新しい行為の形が発明されなければならない、そこに技術が現われる。

以上のように、三木はまず技術を主体の環境に対する適応という観点から捉え、変化した環境に対して本能的に適応できなくなった場合、その新しい環境に適応する非本能的な行為の中に技術の発生を見る。

そして、ゲシュタルト心理学の創始者の一人であるケーラー (1887~1967) のチンパンジーを使った有名な実験を例として取り上げている。得ようとする餌にまっすぐな路がふさがれている場合、回り道をして目的物を手に入れることによって新しい行動の形が発明があり、また棒を使用したり二本の茎をつないだりして餌を引き寄せることに道具の使用や製作があり、技術の発生的な原型が、そこに示されているとする。そして、次のようにいっている。

技術は、元来このように、新しい環境に対する新しい複合的行動様式の実験による適応なのである⁶⁾

三木が狭義の哲学だけでなく、人文社会諸科学の成果に目を配りながら思索していったことは、他の著作例えば『構想力の論理』にも示されている。この『技術哲学』においても、技術の定義は当時の心理学などの成果を踏まえながら示されている。

しかし、それはあくまで自分の哲学を例証し、補強するために援用されたのであって、三木の核心的部分は、思弁的な概念によってあらかじめ構成されているといえる。それは、ケーラーの実験を実例として引いたすぐ後で、「技術が存在するというには主体と環境との対立がなければならぬ」⁷⁾「主体と環境とが対立し、その調和を媒介するものが技術である」⁸⁾と述べるときに顕わになる。

「主体」と「環境」の「対立」と「調和」というのは、ケーラーの実験から直接に帰納的に導き出されたものではない。「主体」と「環境」、「対立」と「調

和」は、三木があらかじめ持っている哲学的、思弁的概念である。

「主体」と「環境」は、純粹意識としての「主観」とその対象としての「客観」の関係を基本にして哲学を構成しようとする認識論的立場を超え、存在論的見地に立って行為の哲学を構築するための基礎概念として捉えられたものがある。「主体」と「環境」の関係は、内在的でありかつ超越的なものとして捉えられる。「対立」と「調和」はこの「超越的・内在的」関係をより具体的に表現したものである。

次に、技術のもう一つの定義について、見ておくことにしよう。上述のように、技術はまず「新しい環境に対する新しい複合的行動様式の発明による適応」と定義される。次いで、技術的行為に含まれる道具について、特に最も原初的な道具である人間の「手」について一通り考察した後で、

技術にとって道具が構成的であるということは、技術の本質が生産にあることを意味している⁹⁾と述べられ、技術は「物を作ること」¹⁰⁾と定義される。道具は、必ずしも生産のためだけにあるのではない。道具の考察から、直ちに技術の本質が「生産」にあるとするところに、三木がマルクス主義へ接近した時期に得た思想の遺産を見ることができ¹¹⁾。

しかし、三木の「生産」概念は拡大され、物をつくること一般、制作（ポイエシス）一般に拡張される。

技術は物を作る行為である。それが如何なるものであろうと、道具の如きものであろうと機械の如きものであろうと、人間の心や身体の形の如きものであろうと、社会の制度或いは観念形態の如きものであろうと、物を作ることが技術の共通の本質である¹²⁾。

これで見ると、三木のいう「物」とは広い概念で、すべてのものを包括しているようである。したがって、重点はむしろ何かを「作る」というところにあり、何であれ「作る」ということが技術の本質であるということである。

さて、以上のような技術の本質に関する二つの定義は、どのように結びつくのであろうか。「新しい環境への適応」と「物を作る」ということとは、矛盾しないのであろうか。一方は、受動的な行為であり、他方は、能動的な行為である。一見矛盾しているかもしれない。

しかし、まさにこの対立する二つの側面を、同時にあわせ持っているところに、技術の本質がある。三木

は、次のように述べている。

主体が積極的な仕方でも環境に適応するために、これに働きかけてこれを変化し、新しい環境を作つてゆくところに技術は存在するのである¹³⁾。

つまり、適応とは変化した環境に単に受動的に順応することではなく、自ら環境を変え新しい環境をつくっていくことであり、その中でも自らも変わっていくことである。「物」という概念が広いように、「環境」という概念も広い。三木は「自然環境」だけでなく「社会環境」や「文化環境」、さらに「外的環境」に対する「内的環境」について述べている。

このように「物」の概念を拡大し、「環境」の概念を拡大すれば、「主体」が「環境」に適応することと、「物をつくる」とことは結びつけられ、「技術」の本質を定義するものとされてもおかしくはない。三木は、人間の文化形成過程の全体を技術的と規定しているのである。

物を作るということをもっと広く解するならば、我々の行為はすべて物を作るという意味をもっている、すなわち形成的である。我々は物を作ることによって自己を作つてゆく、我々の行為は環境形成的であると共に自己形成的である。人間は環境から作られたものでありながら独立なものとして逆に環境を作つてゆく¹⁴⁾。

このような人間の文化形成的・歴史形成的行為が、なぜ技術的かといえば、主体としての人間とその環境との間に「対立」があるからである。

人間の生活はつねに環境における生活であるが、人間は主体として環境に対立し、この主体と環境との対立を媒介するものが技術である¹⁵⁾。

つまり、主体と環境が対立していないとき、本能的な適応行動がなされるが、主体と環境が対立するとき、それと媒介する技術的行為が発生するというわけである。人間の文化は、このような主体と環境との対立を前提としており、それを媒介する技術的行為の堆積として形成されたことになる。三木が技術の本質を捉える際の基本的視座は、以上のようなものである。

しかしこれは、彼が当時の実証諸科学の成果に基づいて設定した理論的仮説ではない。彼の著作には、広範な読書から得られた知見が散りばめられている。ただし、その背後には思弁的な哲学の骨組みがあらかじめ構成されている。「主体」と「環境」の対立も、「人間の存在の本質は超越である」という根本命題から、演繹されている。

人間は環境に対して内在的であると同時に超越的であり、超越的であると同時に内在的である¹⁶⁾という命題がまずあり、「超越」を「対立」と読みかえ、「内在」を「媒介」「調和」と読みかえて技術の本質が定義されている。

4. 主体と環境

次に、「主体」と「環境」について、他の著作も検討しておこう。1933（昭和8）年から1937（昭和12）年にかけて書きつがれた『哲学的人間学』で、「主体」と「環境」の関係が論じられるのは、第三章「人間存在の状況性」においてである。

その環境というのは自然環境に限らず、文化的環境や社会的環境があること、人間は環境に属し、環境から規定されるが、他方人間はまた環境を規定し、環境をいわば人間化することなどが述べられている¹⁷⁾。

『哲学的人間学』では、人間は「周囲に対して距離の関係に立っている」¹⁸⁾、つまり「離心的」と論じられる。「離心的」とは、「人間に於ける客体から主体への超越」¹⁹⁾を意味しており、人間は周囲の環境に埋没したあり方を越えて「主体」となり、同時に環境も人間に対して超越的、客体的となるのである。

我々はこの『技術哲学』における「主体」と「環境」の概念に通じる規定を見ることができる。

さらに、1940（昭和15）年3月に出版された『哲学入門』では、技術について『技術哲学』と同様の見解が述べられている。哲学の出発点は「現実」とされ、「現実」が人間と環境との関係として分析される。まず人間と環境との関係は、「人間は環境から働きかけられ逆に環境に働きかけるという関係」²⁰⁾として、すなわち「人間は環境から作られる」契機と「人間が環境を作る」契機の両方を持ったものと捉えられている。このような人間と環境との関係は、知識の立場において主観と客観の関係として捉えられるのでは不十分で、行為の立場において主体と環境、または世界との関係として捉えられなければならない。

主体と環境との関係は「適応」とされ、「対立するものの中における均衡の関係」を意味するとされている。そして本能的な適応と知性による適応とが区別され、こうした適応の関係において「技術」が捉えられている。適応は同時に生産である。

技術は与えられたものの上に新しいものを作る、技術は生産的であり、世界を革新したまた豊富にする。人間は技術によって新しい環境を作りつつ自

己を新たにするのである。環境を変化することによって環境に適応するという人間の能動性は知性によって発揮される²¹⁾。

『哲学入門』という本書の性格のためか、「超越」ということは「常識」と「科学」について述べた後で「哲学」について述べたところで取り上げられる。「人間の主体性はその存在の超越性を離れては考えられない。超越は人間存在の根拠であり、超越があることによって人間は人間であるのである」²²⁾。これは、『技術哲学』と同じ見解に達している。

三木の哲学は、『技術哲学』の約1年半前に出版されたこの『哲学入門』で最も纏った形で知ることができる。もちろんこれはあくまで「入門」であって、三木の哲学全体がそこに示されているわけではない。『技術哲学』は『哲学入門』の一部を「技術」というテーマに絞って、より詳しく展開したものといえる。両著作を詳細に対比することは略すが、「形成」ということについてだけ見ておくと、三木は『哲学入門』で次のように述べている。

人間は作られたものでありながら、独立なものとして、みづから作ってゆく。人間が作るのは、みづからも創造的なものとして、世界が世界を作るのに参加することである。人間は、形成的世界の形成的要素である。我々が作るのは、世界が世界を作ることに於いて、そのうちに、作ることでありながら、我々にとって成るものの意味をもっている²³⁾。

『技術哲学』においても同様に、次のようにいう。我々は形成的世界の形成的要素として、歴史的世界の自己形成に参与する²⁴⁾。

『技術哲学』で三木は、主体としての人間とその環境との関係の中で技術を捉えていく。その考察がゆきつくところは、今引用した箇所を示されているように、人間を「形成的世界の形成的要素」とする思想であった。その場合、「主体」概念は二重の意味を持っている。個々の人間が、歴史を作る主体である。しかし、また「世界が世界を作る」のであって、世界が主体である。

ここには『歴史哲学』の時期の、あるいはそれ以前のマルクス主義に接近した時期の、超個人的な主体の概念が形を変えて保持されているともいえる。しかし、直接には西田哲学の影響が大きいと思われる。三木自身が書いているように、『哲学入門』の根底にあ

る究極なものは西田哲学であった²⁶⁾。

西田哲学と三木の哲学は歴史形成の論理、文化創造の論理を追求するものとして共通しているのと思われる。ただし、唐木順三が指摘するように、

西田哲学に於ては形は生まれてくるものであり、
三木さんに於ては技術的に作るもの²⁶⁾

である点に相違があるのであろう。三木は『技術哲学』その他で、技術的行為を「物を作る」「形をつくる」制作的行為として捉え、したがって、環境を変えて文化的世界をつくり歴史をつくっていく人間の能動性、主体性を強調している。この点、三木の技術哲学は、西田に批判的な彼の独自性を示している。

5. 人間と自然

以上のように三木の思索の変遷をたどることによって、晩年に書かれた『技術哲学』が、技術に関わる諸事実の実証的分析から抽出、帰納されたものでなく、それまでに確立されていた彼の哲学の技術への適用であることを知ることができる。

技術の概念は、彼の哲学にとっても主要概念であるから、『技術哲学』はそのまま三木哲学であり、三木哲学の中核を示したものと言える。そこで再び『技術哲学』に戻って、考察を進めていこう。

さて技術は通例、

手段と考えられ、或は進んで手段の総体乃至体系と規定されている²⁷⁾。

このような通常の意味の技術の定義に対し、三木の定義は行為の観点からなされたものであった。彼は、技術と手段の体系とする規定を全面的に否定するわけではないが、自己の哲学の立場からそれを批判的に捉え直している。

三木の哲学の課題は、形式的にいえば認識論的な主観—客観図式を超えることにあった。デカルト以来の近代哲学の基本的構造をなしていた主観—客観図式を超えることは、ヨーロッパの現代哲学の共通の課題であった。

三木にとっても、直接には新カント派的立場の克服の問題として、若いときから一貫して追求されてきた根本問題であった。彼の行為の哲学は、観照の立場を超えたものとして構想されていた。行為は単に主観的でも客観的でもないもの、あるいは主観的でありかつ客観的でもあるものである。行為の立場に立つ三木の技術哲学からすれば、技術を手段と考える者は技術を主として道具の見地から考える者で、客観主義に偏し

ている。「道具の使用、道具の支配が技術」²⁸⁾であって、道具そのものが技術ではない。したがって、道具という技術の客観的な面とともに、「知能或いは技能」という技術の主観的な面が注目されねばならない。

しかし「技能もなお客観的なもの」である。なぜなら、「技能は知識に基づき、このものは客観的に制約されている。技能は客観的な認識を基礎としなければならぬ」²⁹⁾からである。そこで、「人間の意欲或いは意志」が技術における主観的なものと考えられるが、意欲や意志も、道具を手段として目的を実現しようとする技術の客観的過程の中に客観化されてはじめて有効なのであり、恣意的では自然の法則によって否定される。つまり意欲や意志もその意味では、客観的なものでなければならない。

しかし、手段として客観的なものと見られる道具も、一定の目的のために作られたものという点からは主観的なものである。すなわち道具は、主観的かつ客観的なものである。このように考えれば、技術を主観的な目的を実現する道具の体系とする通常の意味の定義は客観主義に偏っており、技術は本来、主観的かつ客観的なものとして定義されねばならない。

目的と手段の関係は、一つの技術の他の技術に対する関係と見ることができる。

一つの技術は他の技術に対して手段であり、このものは更に他の技術に対して手段であると考えてゆくと、諸技術の間に目的・手段の関係における連関を認めることができるであろう³⁰⁾。

例えば、自然技術は軍事技術の手段であり、軍事技術は政治技術の手段であると考えられる。三木は、社会も社会技術により、「道德」も心の技術により形成されるものと考え、自然技術より始まる諸々の技術の全体の総企画の統御を考えていた。三木の行為の哲学が、技術的知識の哲学、「全人的テクノクラート」³¹⁾の思想といわれるゆえんである。

6. 技術と道德—おわりにかえて—

三木の技術論は、オプティミスティックであり、その背後に西田幾多郎のすべてを包み込む調和の哲学があるといわれている。それは、これまで検討したように、技術の本質を主体と環境の対立を前提した上で、それを媒介するものとして規定するのではなく、主体と環境の対立がないはずの自然においても技術を見るところに現れている。すなわち、「人間の技術は自然の技術を継承する」³²⁾と述べている。ここで「自然

の技術」というのは、生物などの環境に対する適応のことで、これまでは本能による適応であって、技術的ではないとされたものである。

『構想力の論理』でも、「生命のすべては技術的である」³³⁾とされている。「環境に対する適応」を一般に技術的としているのである。あるいは、「自然も生産的である」³⁴⁾がゆえに技術的とされ、「すべて生命を有するものは形を有する」³⁵⁾がゆえに、自然も技術的であるとされている。これらは技術の本来の定義からすれば、不当な拡大であろう。「適応」がすべて技術的であるとは限らないし、「形」がすべて技術的に形成されたものとはいえないであろう。

自然においても技術を見るこうした言い方は、人間における本来の技術をアナロジーによって拡大使用したもので、そういう限定があれば問題はない。しかし、この拡大された技術概念を根底において「自然史」と「人間史」とを統一し、「自然の技術も人間の技術も歴史的世界の自己形成の要素或いは段階にほかならない」³⁶⁾とするに至っては、上の技術の本来の定義と矛盾する。

三木は、自然史と人間史との関係を連続と悲連続の弁証法的統一と捉えて、自然史も人間史も包括する歴史的世界が矛盾をはらみながらも調和的に展開するという西田流の哲学で切り抜けていく。確かに、自然史と人間史には連続性があるであろう。人間の技術は、自然を模倣する面があるし、人間も人間の社会も其の根底においては自然である。

しかし、現代は、その非連続性とそのために生ずる人間文化の弊害こそが焦眉の問題になっている。それに対して、三木の技術哲学は終局的な調和を予定しており、その点でオプティミスティックといえる。

三木は『技術哲学』の第二章で「技術社会」の問題を論じながら、確かに、

すべて人間の作るものは人間の生活を発展させると共に人間の生活に対する桎梏になる³⁷⁾

と述べ、技術が人間の生活を発展させたのと同時に抑圧し破壊したことを認め、その技術の社会的道徳的問題、いわゆる「技術者倫理」の問題が生じたといっている。しかし、技術の害悪は、技術そのものから生じてくるというよりも、技術が使用される一定の社会関係から生ずるとして、技術の弊害は、いっそう洗練された技術によって克服されるというのが、三木の主張であった。

文 献

- 1) 原因の一つは、「大学院時代にかれがたまたまひきおこした『学問好きの未亡人』との『情事』」であったといわれている。
- 2) 三木清からの引用は、三木清全集(岩波書店)により巻数と頁数を記す。第7巻, p. 197 (1967)
- 3) 第7巻, p. 212
- 4) 同前。
- 5) 第7巻, p. 197
- 6) 第7巻, p. 201
- 7) 同前。
- 8) 第7巻, p. 202
- 9) 第7巻, p. 205
- 10) 第7巻, p. 206
- 11) 赤松常弘: 三木清—哲学的思索の軌跡, p. 223参照 (ミネルヴァ書房, 1994)
- 12) 三木清全集 第7巻, pp. 209—210
- 13) 第7巻, p. 206
- 14) 第7巻, p. 211
- 15) 第7巻, p. 210
- 16) 第7巻, p. 210
- 17) 第18巻, pp. 247—248参照 (1968)
- 18) 第18巻, p. 255
- 19) 第18巻, p. 225
- 20) 第7巻, p. 10
- 21) 第7巻, p. 22
- 22) 第7巻, p. 57
- 23) 第7巻, p. 62
- 24) 第7巻, p. 236
- 25) 第7巻, p. 3参照。
- 26) 唐木順三全集 第8巻, p. 8 (筑摩書房、1968)
- 27) 三木清全集 第7巻, p. 211
- 28) 第7巻, p. 213
- 29) 第7巻, p. 215
- 30) 第7巻, p. 222
- 31) 荒川幾男: 三木清, p. 191 (紀伊国屋書店, 1968)
- 32) 三木清全集 第7巻, p. 255
- 33) 第8巻, p. 172 (1967)
- 34) 第8巻, p. 186
- 35) 第7巻, p. 227
- 36) 第7巻, p. 256
- 37) 第7巻, p. 270